

# 『紫式部物語・和泉式部物語』の平安異聞を楽しむ

## 資料紹介・アンケート結果

藤 井 佐 美

近年、紫式部を伝える風変わりな物語を読み直す機会がありました。京都での学生時代に出会いまとめた『紫式部物語・和泉式部物語』の研究に基づき、さまざまな縁から二〇二三年の夏に校訂本文を作成し二〇二四年に公開（出版）へという経緯です。折しも紫式部を主人公にNHK大河ドラマ「光る君へ」が放送され、年末には尾道浄土寺蔵「源氏物語図扇面貼交屏風」げんじものがたりずせんめんはりまぜびようぶ（二〇二四年度現在、東京国立博物館に寄託収蔵中）が浄土寺で一般公開されました。

紫式部や『源氏物語』をはじめとする古典文学への関心が各地で高まるなか、尾道文学談話会第一回

（四月一五日・月曜日・18：30～20：00、尾道市役所2F多目的スペース111）でも、手前味噌ではありますが、早々に、『紫式部物語・和泉式部物語』の平安時代をめぐる異聞を「話の種」として談話をおこないました。

本稿は、あくまでもその際に用いた資料紹介とご参加の皆様にご回答いただいたアンケート結果です。進行の記録用として概説にとどめた点やアンケート結果も個人情報保護のために割愛した内容もあります。当日の談話の振り返りや、平安の様々な人物像に思いをお寄せいただく覚書としていただければと存じます。

資料紹介

【資料No.】書名等

\*概説、留意点等（談話資料に掲載した訳は本稿で割愛）

【資料1】『紫式部物語・和泉式部物語』紹介

\*書誌や伝本をめぐる研究史、校訂本文については、以下の内容から紹介しました。

○藤井佐美「新資料『紫式部物語 附・和泉式部物語』紹介 ― 解題・影印・翻刻―」（『平安文学研究・衣笠編』所収 和泉書院 二〇〇九年）

○高橋亨「物語における和歌とは何か・再考―『小式部』と『紫式部物語・和泉式部物語』―」（廣田・辻和良編『物語における和歌とは何か』武蔵野書院 二〇二〇年）。『小式部』伝本・八本のうちの「衣笠本」と位置づけ。

○藤井佐美「衣笠本『紫式部物語・和泉式部物語』校訂試案」（『日本古典文学の言葉と思想』所収 武蔵野書院 二〇二四年）

○書誌

所蔵 個人蔵

形態 袋綴一冊、四針眼訂法、横十五・七糎、

縦二十一・六糎、墨付三十二丁

表紙 前表紙・後表紙とも破損大、紺地に金の橋と蓮華の絵、逆さ綴じ、綴じ糸白色

題簽 無し

内題 一丁表一行目、「むらさきしきふ物かたり」

十六丁表四行目、「いつみしきふ物語」

奥書 無し

印記 内題「むらさきしきふ物かたり」下部に朱印「春景□」。

その他 一筆書、注記等書き入れ無し、補入箇所（補入記号無し）、九丁表袋内側に銀杏一葉有

【資料2】紫式部、和泉式部、小式部（小式部内侍）

\*登場人物三人「……式部」の名から、略称「式部物語」として人物情報の確認。

【資料3】「式部物語」の構成

〈紫式部物語〉

①紫式部の容姿と歌・仏道

②紫式部の娘の歌の才

③紫式部の石山参詣と、娘の継子譚

④『源氏物語』六十帖と本尊を描かせた後の下  
向

⑤娘の容姿と歌・琴の才

⑥娘の病と平癒

⑦和泉式部（娘）の容姿と舞の才

⑧酒吞童子退治譚と、褒美としての和泉式部

⑨紫式部（母）から和泉式部（娘）への教え

⑩在原業平の譬喩

⑪紫式部の石山参詣と、『源氏物語』の五卷  
〈和泉式部物語〉

⑫和泉式部と赤染衛門の交流

⑬和泉式部と保昌の復縁

⑭和泉式部の子（娘）捨て

⑮捨て子の成長

⑯母娘の再会と、養父母を伴う上京と繁栄

⑰帝の御前での小式部（娘）の詠歌

⑱和泉式部（母）と小式部（娘）の歌道奨励

【資料4】式部物語の前半「紫式部物語」のあらす  
じ

中頃、上東門院（中宮彰子）のもとに紫式部と  
いう才色兼備で信仰心の篤い女房がいた。ある  
夜不思議な夢を見て懐妊し、美しい女兒を産ん

だ。その子は幼い頃から和歌に秀でていた。母・  
紫式部はやがて石山寺に籠もり、『源氏物語』

六十帖を書き上げるが、幼子はその間、継母の  
手に預けられて辛い思いをした。また、十三の  
春には鬼神に魅入られて重病に罹るが、詠んだ  
歌が鬼神を感動させて事なきを得た。こうして、  
この娘も中宮の目にとまり、和泉式部の名でお  
仕えした。その頃、都には夜ごと酒吞童子とい  
う鬼が出て人の命を奪っていた。勅命を受けた  
源頼光・保昌は住吉明神の加護により、見事に  
鬼を退治し、保昌はその勲功により和泉式部と  
結ばれた。和泉式部はその後、歌の名人・道命  
法師と浮き名を流すが、それを聞き知った母・  
紫式部は『伊勢物語』の在原業平の故事を引い  
て娘を諭した。その後、紫式部はふたたび石山  
寺へ詣り、『源氏物語』六十帖のうちの五巻を  
抜き取り外部に出さないよう隠すことにした。  
これを外に公表すると石山寺の御罰を蒙ると伝  
えられている。

【資料5】紫式部の容姿と歌・仏道（式部物語①）  
校訂本文

中頃、上東門院の御内に、紫式部といふ賢女あ

り。その姿妙にして楊柳の風に靡くが如し。翡翠の簪、御身の透き通りたる風情、乱れ懸かる鬢の外れより、顔の匂ひ、薄雲に月の透きたる如し。唇は芙蓉の如し。ただ姿、園生の中の花の、夕映えに咲きこぼれ、梅桜の心ばへ、幽玄常にして世の常の人に優れたり。琴の、琵琶の上手並びなく、また歌の道、昔、衣通姫の跡を継ぎ、伊勢小町が如し。そののみならず、御法の道も明らかなり。龍女が跡を訪ね、法花経を不断読みけり。此のよし公より聞こし召し給ひて、やがて召し出され、采女上童の中にも、これをもつて一とす。

【資料6】紫式部の娘の歌の才（式部物語②）校訂本文

ある夜、不思議の夢を見て、その身ただならず、月を経て玉を延べたる如くなる姫を儲け、ただ世の常の人の子とも見えず。誠にいつくしき事、言葉にも及び難し。程なく成人して、既に六つになり、いつくしき言ふもはかりなし。あまりのいとほしさに姫が髪を掻き撫でて、我とくかまへてかまへて、歌を詠み習へと言ひければ、なにとして歌をば習ひ候ふべきと、おとなしや

かに問ひければ、古歌の面白きを見て、それを本にせよ。伊勢、小町が詠みたらんをよくよく見て、夜昼も二心なく好めば、いかにもあるぞと言ひければ、かの姫うち笑ひて、

母や母好めば歌の詠まるるに

播粉の鉢に血添へて賜べ

とぞ言ひける。あまり幼氣したる言葉なりけりや。乳母は皿をかやうに詠みたりけるとて、笑壺に入りてぞ愛しける。

【資料7】紫式部の石山参詣と、娘の継子譚（式部物語③）校訂本文

その後、紫式部言ひけるは、我宿願の事ありて、石山の觀音に参るべし。三七日籠もるべし。その程、継母御に従ひて憎まるるなど言ひければ、なにとして三七日まで待ち候ふべき。とくくとく下向させ給へと言ひければ、十日ばかりとぞ言ひける。その後、継母に附きて居たりけれども、あまり幼氣して、いつくしかりければ、継母も憎み給はず。

ある人伊勢へ参りけるが、土器のやうなる小鍋を二つ苞にしてあるを、継母我らが子の二人ありけるに、一つづつ賜びたり。この姫には賜

ばざりければ、あまり欲しさに泣き居たりけるが、折節軒の内に鶯の囀りけるをつくづくと聞ききて、

鶯よなどさは鳴くぞ乳や欲しき

小鍋や欲しき母や恋しき

とうち詠め、涙を流しければ、継母御も哀れに思ひて、我子の持ちたるを一つ乞ひて、かの姫に賜ひけり。

【資料8】『古本説話集』十六「継子小鍋歌事」

\*前掲【資料7】に関連し継子話の類話を紹介。

平安後期く鎌倉時代の説話を紹介。

【資料9】『袋草紙』上二二五「幼児歌 鶯よ……」の解説文

\*前掲【資料7】に関連し継子話の類話紹介。平安

後期の藤原清輔が著した歌論書より紹介し、昔話

「継子と小鍋」（時鳥と小鍋）、小鳥前生譚と継子

譚を概説。

【資料10】『袋草紙』上二〇二 為時の歌をめぐる紫式部に関する解説。

\*父藤原為時の官職に由来する「式部」と「紫」の名について

【資料11】『源氏物語』六十帖と本尊を描かせた後

の下向（式部物語④）校訂本文

その後、紫式部石山にて源氏六十帖作り、石山の<sup>○</sup>大般若の裏に書きたりける我姿を、絵師を呼<sup>○</sup>び下し似せ絵に書かせ、庵室を造り、この絵を本尊として菩提を弔ひて賜べと言ひ置きて、所<sup>○</sup>領を寄せて下向しけり。今法花経の声絶へざり<sup>○</sup>けり。

\*『源氏物語』執筆経緯と石山寺所藏土佐光起による紫式部像について

【資料12】紫式部（母）から和泉式部（娘）への教え（式部物語⑨）校訂本文

都にその頃、道命法師と言ふ歌詠みの名譽ありけるに、和泉式部時々歌の大事ども習いければ、既に怪しき疑ひを得たりし程に、人々の讒により、保昌少し荒みさせ給ひけり。既に年を重ねければ、母の紫式部、この事を聞きて、呼<sup>○</sup>び寄せて、よろづの女房の振る舞ひをぞ教ふけり。大事の秘事なり。左右なく人に見すべからず。その詞に曰く、人に交じる事は全て大事のものなり。よくよく聞くべし。君の御恵み深くとて、我ら顔して片方の人目並ぶ人に憎まるべからず。やがてやがていかなる事をも言ひ付け

て、讒せらるるものなり。又人に交じる時、目ばかりにて人をば見るべからず、顔どもに見るべし。目ばかりにて見れば、憎げに見ゆるなり。又さのみ俯きて居るべからず。又おかしき事ありて、人の笑はば、少しも惚れ惚れとして笑ふべし。悪しく言ふとも我識り顔に差し出でて言ふべからず。一向に言わねば、知らず者になる。総じてさのみ言葉多く物言ふべからず。又あまり物を言わねば、人を嫉むやうなり。又思ふ夫に向きても、思われ顔にあるべからず。さのみ物嫉み深くすべからず。そのまま遠ざかる事あるべし。又嫉む気色なければ、かへりて此方を疑ふ事あるべし。

【資料13】『伊勢物語』第二十三段（『古今和歌集』卷十八、『大和物語』）

\*式部物語⑩に関する物語。愛し合い結婚した男女の後日談と和歌「風吹けば沖つ白波立田山夜はにや君が一人行くらん」の概説。

【資料14】紫式部の石山参詣と、『源氏物語』の五巻（式部物語⑪）校訂本文

かやうに様々御教へ置きて、紫式部は又石山へ参るなりとて出でて、源氏の六十帖の中を五巻

取りて深く納めけり。源氏の雲隠れ様々の説多し。これ一説なり。大事の秘事なり。たやすく人に見すべからず。ゆるがしうせば、石山の御罰を蒙るべし。あなかしこあなかしこ。

【資料15】『源氏物語』六十帖（六十巻）説について

\*前掲【資料14】に関連する『源氏物語』巻数について。一般に五四帖（五四巻）と言われますが、宇治十帖を一巻にするなど内容に応じてまとめるようないろいろな数え方があります。六十巻説については鎌倉時代頃から見え始め、天台經典六十巻（『妙法蓮華經文句』十巻、『妙法蓮華經玄義』十巻、『摩訶止観』十巻、『法華文句記』十巻、『法華玄義釈籤』十巻、『止観輔行伝弘決』十巻）になぞらえて、仏教的観点から『源氏物語』を読み進めようとする流れから当初の巻数を推測した説があります。

【資料16】『源氏物語』雲隠とは

\*前掲【資料14】に関連する巻の情報。『源氏物語』五四帖の巻名の一つで、幻巻と匂宮巻の間にあるとされますが巻名だけが伝えられています。室町時代の『源氏物語』注釈書にも見えません。なお、

江戸時代初期成立の阿里莫本とされる「雲隠六帖」(雲隠・巢守・桜人・法の師・雲雀子・八橋)をふまえると六十巻説に格好の巻数となりますが、「式部物語」の抜き取りを五巻とする点とは一致しません。

【資料17】『源氏物語』と仏教をめぐる考え方

\* 仏教的立場から文学Ⅱ「狂言綺語」(偽り飾ったもの、作り物語は罪と卑下する考え方)が平安中期にあらわれてきますが、一方では物語や和歌が仏道修行の一助となるという解釈もありました。『源氏物語』の読み方は仏教との関連づけも話題で、『今鏡』では紫式部の墮地獄説に対する菩薩化身説が説かれましたが、墮地獄説から源氏供養を説く内容(源氏一品経表白、源氏物語表白、源氏物語願文、宝物集、お伽草子「紫式部の巻」、謡曲「源氏供養」)も知られています。

【資料18】『今鏡』「作り物語の行方」

\* 歴史を伝えようとする『今鏡』の語り手・郎女「あやめ」は、物語を作ることはそれほど重い罪業ではなく、『源氏物語』には人々を仏の教えへと導く面があるので、紫式部は実は妙音菩薩や観音菩薩といった聖の化身だとして墮獄説を否定しまし

た。

【資料19】『宝物集』巻五「不妄語」

\* 平康頼編纂の仏教説話集では、紫式部が『源氏物語』を作った罪により地獄に墜ち苦しんでいる様子がある人が夢に見たので、歌人が集まって経典を写して供養をしたという話が思い出されると伝えます。

【資料20】『今物語』三十八「源氏供養」

\* ある人の夢で、紫式部が「偽り事を集めて人の心を惑わし地獄にいるため、南無阿弥陀仏を巻ごとに読み上げて救ってほしい」と訴えた話。

【資料21】式部物語の後半「和泉式部物語」のあらすじ

母にたしなめられ憔悴した和泉式部に、赤染衛門は和歌を贈って慰めた。和泉式部は巫女に伴われて出雲大社に参詣し、神前で霓裳羽衣(楊貴妃が得意とした舞曲)の舞を舞い、夫・保昌との関係を回復することができた。そして、十七歳の春に女兒を産むが宮仕えの身を懼り、東寺の門前に捨て子をする。赤子は清水寺へ子授け祈願に来た河内国の老夫婦に拾われて大切に養育され、成長とともに和歌・連歌に秀でた

孝行娘になった。時は流れて、行く末に不安を抱く年齢になった和泉式部は、捨てた子を探す旅に出る。長谷寺で祈願した和泉式部は河内国の奥山に迷い込み、偶然にも一夜の宿を請うた老夫婦の家で、歌の贈答をきっかけに十一歳になった娘との再会を果たす。母・和泉式部と一緒に都へ上った娘は、帝の住吉行幸の場で見事な歌を詠み人々を感嘆させたことから、小式部内侍として召されることとなった。ある日、帝が大切にしていた小松が枯れたが、小式部が歌を詠んだことで小松が瞬く間にすばらしく蘇った。ゆえに、いかにも歌の道は嗜むべきことであるという。なんともめでたいことであった。

【資料22】赤染衛門について

\*平安中期の女流歌人で大江匡衡に嫁し藤原道長の妻倫子に仕えた。以下、「式部物語」登場人物との交流について概説。

【資料23】和泉式部と赤染衛門の交流（式部物語⑫）  
校訂本文

和泉式部は雲の上人の中にも勝れたる事、言葉にも及び難し。かやうの折節、道命法師に名は立ちしかば、よろづ心も叶はず、片方の人々に

交じるも恥づかしく思ひし程に、かやうにては  
いがあるべしと力なし。保昌に暇乞ひて、世  
を浮き草に譬へ、誘ふ水あらばと千々に心を碎  
きし折節、都に赤染衛門と言ひし人ありしが、  
和泉式部が恋を訪ひ、一首歌をぞ贈りける。

移ろはでしばし信田の森を見よ

返りとぞする葛の浦風

これを聞きて、さては同じ世の程まで思ひける  
やと思ひて、その返歌に、

とく(年)経ると変はらん物か和泉なる

信田の森の千重の葛の葉

これは和泉の国に信田の森とてあり。男女の道  
を守り給ふ神なり。その神の色変わらずと言へ  
り。赤染の歌の信田の森は尾張の国にあり、こ  
の森の神は出雲の信田の神と夫婦なり。その森  
には葛蔓を神体としけり。これに深き口伝あり。  
恋路の森なり。習ふべし。

【資料24】小野小町説話

\*前掲【資料23】関連和歌「わびぬれば身をうき草  
の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」(古今  
和歌集) 938)

【資料25】赤染衛門と和泉式部の交流について

\*敦道親王が和泉式部のもとに通い始めたと聞いて赤染衛門が式部に送った「うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風」(『新古今和歌集』1820)と、和泉式部の返歌「秋風はすこく吹くとも葛の葉のうらみがほには見えじとぞ思ふ」(『新古今和歌集』1821)

【資料26】『源氏物語』五十一帖「浮舟」巻

\*心変わりをしない歌の例。光源氏の孫・匂宮から浮舟への歌「年経とも変はらむものか橘の小島の崎に契る心は」

【資料27】……和泉なる 信田の森の千重の葛の葉

\*前掲【資料23】浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』「葛の葉子別れ」段のあらずじから、白狐を母とする安倍晴明伝説紹介。

【資料28】紫式部から見た和泉式部 (『紫式部日記』の人物批評)

【資料29】紫式部から見た赤染衛門 (『紫式部日記』の人物批評)

【資料30】紫式部から見た清少納言 (『紫式部日記』の人物批評)

\*「式部物語」には登場しませんが、紫式部による人物批評の一例として。

【資料31】御伽草子について

\*「式部物語」をめぐる伝本研究に基づき、「御伽草子」としての位置づけについて説明。

【資料32】狭義の御伽草子

\*渋川清右衛門が出版した二十三篇。文正草子・鉢かづき・小町草紙・御曹司島渡・唐糸草紙・木幡狐・七草草子・猿源氏草紙・物くさ太郎・さざれいし・蛤の草紙・小敦盛・二十四孝・梵天国・のせ猿さうし・猫の草子・浜出草紙・和泉式部・一寸法師・さいき・浦嶋太郎・横笛草紙・酒吞童子

【資料33】御伽草子「和泉式部」のあらずじ

\*前掲【資料32】関連話。一条天皇の御代に橘保昌とのあいだに一子をもうけた和泉式部はその男子を五条の橋のもとに捨てた。子は拾われてやがて比叡山に登り道命阿闍梨という高僧になった。ある時、宮中の法事に召された道命は三十歳ほどの女房を見染め契りを交わした。その後、男を我が子であったと知った和泉式部は、播磨国書写山で出家を遂げたという発心譚。道命は藤原道綱の子で、鎌倉時代の説話集『古事談』『宇治拾遺物語』でも和泉式部との恋愛話が伝えられている。この話の夫「橘保昌」という名は、和泉式部の二人の

夫の橘道貞と藤原保昌が混同されている。

【資料34】御伽草子「猿源氏草紙」のあらすじ

\*前掲【資料32】関連話。卑しい身分の鯛売り「猿源氏」が五条東洞院の美しい遊女「螢火」を見染め、歌の徳によって首尾よく結ばれる物語。主人公の名は、滑稽な印象を与える「猿」と、『源氏物語』の光源氏の名を組み合わせている。物語の中で和泉式部の恋愛を例話として紹介する。

【資料35】「猿源氏草紙」に紹介された「和泉式部の色好み」

\*前掲【資料34】関連話。和歌説話

【資料36】「猿源氏草紙」に紹介された「鯛好きの和泉式部」

\*前掲【資料34】関連話。江戸後期には紫式部をめぐる伝承話。女房言葉「鯛」||「むらさき」

【資料37】式部物語の魅力

\*公家物、歌人伝説、歌徳説話、文芸に秀でた三人の式部を親子関係として物語る、夢想懷妊、継子話、捨て子話、酒呑童子話、道命法師説話、夫婦復縁話、『源氏物語』六十巻説、女訓書へ。

【資料38】在地伝承「尾道の和泉式部」(『尾道の民話・伝説』「和泉式部と向東」)

平安中期の歌人和泉式部は、厳島参詣のとき眺めの良い向東に再々立ち寄ったということで、長徳四年(九七九年)の参詣のとき、向東沖で大嵐に遭いました。船は木の葉のようにゆれて、今にも沈没しそうです。和泉式部は、お守りを天に向けて高々とさし出すと、お祈りを始めました。「いつときも早く、この嵐をお静めください。私の願いをお聞き届けくださったら、お寺を建ててあげましょう」と和泉式部の願いがかなって、やがて嵐は治まり、船は船戸に着きました。そこには、航海の安全を守るとされている金比羅宮がありました。そのとき、和泉式部は先に菅原道真公が登って天神山と名づけられている山へ行き、一本の松を見つけると、金比羅宮のそばに植えました。この松は、上へは伸びず横へ横へと枝はをのぼし、やがて「古江浜の下がり松」と呼ばれるようになりました。が、今では枯れてしまつてその姿を見ることはできません。度々の来訪に、里人たちはすっかり和泉式部とうちとけていきました。あるときのこと、近くの古い池に龍が出るといううわさが広がりました。恐れた人々はそのことを和泉

式部に話しました。話を聞いた和泉式部は、その古い池まで足を運ぶと、

へるお谷 おそしとぞ思ふ唐衣

龍をきじとたれか言ふらん

と詠み、東北の山頂に龍王神をまつりました。それ以後、龍を見たという人はいなくなりました。また、和泉式部は嵐から守ってくれたお札に、西金寺を建てました。この寺には和泉式部の供養塔があり、今でも近所の人々から愛されています。

\*尾道の和泉式部伝説については、柳田国男『女性と民間伝承』所収「備後の和泉式部」の論考もあります。

### アンケート結果

補足資料（藤井作成：NHK大河ドラマのタイトル一覧）を手掛かりに、歴史上の人物の伝え方について語り合う時間を設けました。以下は終了後に提出くださったアンケートの結果です。

#### 【お尋ねした内容】

○歴史小説の主人公で、好きな人物やドラマで観たい人物と、その人物の魅力を教えてください。

\*自由記述

#### 【ご回答の内容】

○和泉式部（恋愛や小式部内侍を思うところなど、人々の心を動かすエピソード、実話がどうかなどはおいとして）

\*『紫式部物語・和泉式部物語』の登場人物について、血縁関係などはめちやくちやだったが、和泉の歌が即興的で上手なところや、紫式部の理想の女房（女性像）を語るところなど、本人らしさが取り入れられていて面白かったです。

○松尾芭蕉（俳句のセンスが自分好み）、伊能忠敬（日本全国を自分の足で歩き続ける根気）

○足利義輝（辞世の句が好きです。これに辿り着くまでの映像作品が見てみたい）

○杉田久女（高浜虚子に嫌われてながらも……。田辺聖子さんの杉田久女像がよかったです。女性の俳人として大変魅力的など感じました）、山田方谷（方谷駅に行ってみました）

\*本日は楽しいお話を聞かせていただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

○与謝野晶子（歌の世界で、女としてどう生きたか。歌人・妻・母の両立の生き方）

\*参加者の声を聞いていたのは良かったです。楽しいお話をありがとうございました。

○朝胡三郎義秀（豪放磊落、『朝胡巡島記』『鎌倉見聞志』）、陶晴賢（悪い美少年、『近世説美少年録』）、神道徳二郎（義賊『天明水滸伝』）

\*悪の人物を主役にしたものが見たい。

○良寛の人生

○聖徳太子、日蓮（現代の世相を思うと興味がある。特に日蓮は内村鑑三が日本三文学者と讃えたと聞いているため）

\*初めて参加でした。学生時代を思い起こし少し若返る事ができました。ありがとうございました。

○足利尊氏（尾道に関係した人）、義経（子供心に京の橋の話が忘れられない）

○菅原道真（東風吹かばの歌）

\*素敵な男性ではなかったかと私は感じています。が、とても最後はお気の毒な人生でもあったかと思われ、泣きそうになります。悪人から神様になり、今も学問の神になった事は感動しています。

○金太郎。（歌で知られ、神楽では酒呑童子の由来になり、金時豆でも身近な人のことをもつと知りたいです。子の金平はキンピラゴボウの名について

ていますね）

\*歴史小説とは関係ありませんが、フレーザーの『金枝篇』の現在の評価を知りたいです。

○滝沢馬琴、葛飾北斎、西行（北斎美術館に行くところ、いろいろ破天荒だったこともわかり、大河ドラマにしにくいかもしれませんが楽しそうです。馬琴や西行も人間関係や人格をどう描くか、どうドラマになるか知りたいです）

\*継子をいじめなかったという展開が、光源氏がかわいらしかったので憎みきれなかったという、弘徽殿のあたりを思い起こされました。

○神武天皇（多くの苦難を乗り越えてやまとのくにをつくつたとされているので）

\*卑弥呼は永遠のテーマです。本日はありがとうございました。

○聖徳太子、卑弥呼（よく分かっていないので。昔の時代にカリスマ的な力や能力を発揮したのかを知りたい）

\*二人については資料がなさすぎてファンタジーになりますかねえ。

○藤堂高虎（主君を次々と変えた。今は会社をどんな変えている時代である）、小早川隆景（隆景

は智将であり、招来は海の時代が来ると高山城から三原へ城を移した)、加藤清正(豊臣のため忠節を尽くした)

\*本日は老若男女たくさん参加されてよかった。『源氏物語』は読もうと思ったが難しくて何回も挫折し、和歌を理解する素養も必要だと思っている。

○明治、大正時代の女性たち(私たちのすぐ前の女性たちが、いかに生き抜いてきたかを見たい)

○関羽雲長、織田信長、高杉晋作(三国志演義の裏の主人公。物語では人格者としてスタートし、終盤は年老いて傲慢になり捕らえられて処刑される)

\*人物の人生、良くも悪くも面白い。

○楠木正成(主君に仕え、大軍を小軍で迎え撃ち、頭脳戦で戦い抜いた漢)、吉備真備

○吉備真備(遣唐使関係の話を描いて当時の国際交流の有りようを見せてもらいたいなと思ったりします)

○山本五十六(太平洋戦争開戦時の行動や考え方)

○光源氏(いろいろな女性を相手にするところ)

\*紫式部の、人を厳しく批判した人という側面を知ることができて、「式部物語」も面白かった。

○服部半蔵などの忍者(フィクションの世界では人並み外れた技など、とてもカッコイイ)

\*今日の講義は今でいう二次創作のようなものなのかと思います。談話の意見に「この作品自体の何が面白いのかよく分からない」という意見がありました。若人々(最近の創作に慣れ親しんでいる人)にはすんなり面白く読めるかなと思えました。私は、「とんでも設定」やその中で樂ちよつとした「本当っぽさ」が大好きなので樂しかったです。

— ぶじい・さみ 日本文学教授 —